

『カリスタ』にみるニューマンのパーソナリズム

——その一考察——(1)

長 倉 禮 子

I

1. はじめに

1845年に45歳で英国教会からローマ・カトリック教会への転会を遂げたニューマン (John Henry Newman, 1801-1890) は、その後司祭職を志してローマに遊学中、⁽¹⁾自らの心の遍歴を小説『得失』 (*Loss and Gain*) ⁽²⁾において著わした。その完成をみて程ない1848年の初春、ニューマンは第二の小説『カリスタ』 (*Callista*) を書き始めたが、第一章、第四章、そして第五章の大部分とジューバ (Juba) の人物およびその生活の浮沈をスケッチした後、数年間筆を措いたままであった。⁽³⁾ところが1855年夏、聖女マリア・マグダレナの祝日 (7月22日) の数日後、ニューマンは突如執筆を再開し、⁽⁴⁾九月にはそれを完成させ、その年の終りに小説『カリスタ』は匿名で出版されたのである。

『カリスタ』⁽⁵⁾は、ニューマンのカトリックへの転会後まもなくの四十七歳から五十四歳にかけてという、人間的にも思想的にも成熟し、内面の充実を最も経験していたであろう年代に書かれたものである。従って、それまでに蓄積された知識、思想、人間理解、そして信仰と愛などが、彼の中で総合されて深まり、内部から湧き出てきた、あるいは書かずにはおれなかった作品と言ってもよいであろう。⁽⁶⁾『カリスタ』は著者の存命中九版を数え、他の言語にも訳され、今日まで続いてかなり広く読まれているが、ニューマン自身この作品を自分にとっても読者にとっても大きな意味を持つものだと考えていたようで、版を重ねる度に校訂を繰り返している。⁽⁷⁾このようなことを考えると、『カリスタ』はニューマンを理解する上で極めて重要な作品であることは言うまでもないが、他のどの作品にも増してここにはニューマンの特徴が遺憾なく発揮されており、『カリスタ』は最もニューマンらしい作品であると言うことができよう。⁽⁸⁾

『カリスタ』初版の序文でニューマンは、本書は一カトリック教徒の視点から第三世紀のキリスト教徒と異教徒との相互関係と感情を想像して表現してみようとしたものであると書いており、1888年の改訂版の序文では、特にカトリック教徒である読者にたいして彼らの覚悟が如何にあるべきかを教化するために書いたと強調している。確かに『カリスタ』はキリスト教徒と異教・異文化との出会い、その相克および受容の問題を含んでいる。またしばしば指摘されるように、本書にはニューマン自身の伝記的要素が現われていることも事実である。⁽⁹⁾本書の主題は「良心」 (conscience) や「回心」 (conversion) の問題あるいは信仰への道を示すものであるという人も多い。⁽¹⁰⁾石田憲次は『カリスタ』の主題を「愛」であるとし、「エロースとアガペー」の問題であるとした。⁽¹¹⁾これらのいずれも間違いではない。しかし、これらの主題の更に根底にあるのは、実はペルソナ (persona) の思想ではないかと筆者には思われるのである。

ところで、本書の主題をエロースとアガペーとして捉えるとき、主人公カリスタとアジェリアス (Agellius) がそれぞれに求めていたのは、質の異なった愛であるかのように説明されることがある。地

上の如何なるものによっても満たされることのないカリスタの魂の渴望は、確かに超地上的で絶対の愛へと向かうものであるが、カリスタに対するアジェリアスの求愛も、一時的には地上的な慰めを求める利己的な愛であったとしても、究極的にはカリスタと同じところへ高められていく一つの過程として描かれている。両者の愛への渴望は、それぞれに第三の人物シシリウス (Caecilius) を介して、あるいは清められ、あるいは照らされ、更には深められ、高められて、遂に至高の人格キリストへの愛にまで導かれ、両者とも最後には死を賭してその人格との一致へと向かっているのである。また異教の少女カリスタが常に心のなかに感じていた真の愛への憧れは、消すことができない心の声として表現されている。これは、地上の如何なるものによっても満たされ得ない絶対の愛に対するカリスタ自身の心の渇きであると同時に、絶対の愛のほうからのカリスタの人格に対する呼びかけでもある。つまり、ここにあるのはニューマンが生涯問題とし、かつ生きた「神と我れ」の問題である。⁽¹²⁾そして、「神と我れ」の問題こそニューマンの宗教思想の中心である。また、その愛への目覚め、憧れ、そしてその愛との出会いへとカリスタが導かれていったのは、常に人との出会いを介してであった。ニューマンの生涯に亙る大きな関心事であった教育思想の中心には、先ず人格としての人間があり、彼にとって真理と信仰が伝達されるのは(従って教育も福音宣教も)「人格的影響」(personal influence)による以外には有り得なかった。ここにもまた、ニューマンの人格主義(personalism)⁽¹³⁾のもう一つの面が見られるのである。勿論、これら二つの面の交錯するところで、カリスタやアジェリアス自身の人格が成長していくことは言うまでもない。従って、愛の主題を通してこの物語が読者に示しているのは一貫してペルソナの問題ではないであろうか。

以上見てきたような、二つの面を含むニューマンの人格主義とでも言える思想が、小説『カリスタ』の中にどのように現われているかを主人公のカリスタに的を絞って解明してみたい。ニューマンの生涯およびその著作を主たる手掛かりとして論じていくことになるが、それに先立って本稿では先ず物語の粗筋を概観し、次いで物語の舞台設定、描写、および構成等について一応の考察をしておきたい。

2. あらすじ

カリスタはカルタゴの南西、シッカ(Sicca)の街に住むギリシャ人の少女である。彼女は兄のアリスト(Aristo)と一緒に偶像や護符を商うジューカンドス(Jucundus)に招かれて、その商売に協力するためにギリシャからやって来た。二人は神殿に捧げる偶像や神々の肖像を彫刻したり、彩色や金メッキを施す仕事に従事している。彼らの住いの近くには、ジューカンドスの甥で一寸した財産を所有しているアジェリアスというキリスト教徒の青年が居る。彼の父ストラボ(Strabo)はローマの軍団兵であったが、退役した後、家族ともどもジューカンドスの住むシッカに移り住んだ。彼はそこで妻を失い、ヌミディア人(Numidian)の血をひく女性ガータ(Gurta)と再婚した。彼はこの女性に苦しめられたが、やがてキリスト教徒となり、信者として立派な晩年を過ごし、平和な心で良き死を迎えることができた。先妻の子供であるアジェリアスとその弟ジューバがそれぞれ八歳と七歳の時であった。アジェリアスは六歳の時に自分から望んでキリスト教の洗礼を受け、堅振と初聖体も受けたが、弟の方はむしろ義母の影響を受けてしまい、自由奔放な生き方をしている。

アジェリアスは異教徒の学校へ進んだが、そこにはキリスト教徒はいなかったし、彼は偶像を避けていたために友達も出来なかった。そしてこの学校に学ぶうちに、自分の宗教に対する無数の疑問が生じてきた。しかし、彼の周囲には彼の疑問に答えてくれるものも、心のなかに沸々とたぎる知的な渇きを癒してくれるものも居なかった。父親の死後は、農場経営の手腕を買われて小さな農場を任せられていたが、外面的な成功とは裏腹に、心のなかでは宗教的倦怠感が次第に増大し、ひどい孤独感にさいなまれていた。彼の心の問題に同情を示してくれるような人はおらず、その解決に糸口を与えるか、生き方の模範を示してくれるような人物もいなかった。幼年時代に体験したキリスト教徒であることの喜びは何時の間にか薄らぎ、彼の信仰はあやふやとなり、心はすっかり安定を失ってしまった。

こうした心の問題を抱えた二十二歳の青年アジェリアスの前に現われたのが、地上的な美しさを余すところなく身に帯びたギリシャ人の少女カリスタである。アジェリアスは、カリスタとその兄のアリストと付き合っているうちに大いに知的な刺激を受け、心のなかの疑問の幾つかも解決され、次第に心が満たされていくのを経験する。それと同時に彼はカリスタの清純さに強くひかれ、カリスタがキリスト教に帰依して自分の妻となってくれたらどんなに良からうかと考えるようになる。そしてある日遂に意を決して、カリスタに自分の想いを打ち明ける。ところが意外なことにカリスタは激しい言葉でアジェリアスの求愛を退けたのである。

カリスタの方ではまた、自分ではそれが何であるかは良く分からないが、心の中にある抗い難い憧れをずっと感じている。それは彼女の心の奥深くで、何かを渇き求めて止まないもののようであり、また彼女に呼び掛けている何者かの声のようでもある。彼女は幼児期にキリスト教徒である乳母のカイオーネ（Chione）に育てられたが、この乳母からある強い印象を心の中に刻み込まれていて、それが今でも深く心に残っているために、キリスト教徒であるアジェリアスが自分とは違う何かを持っているはずだと秘に彼に期待していたのである。ところが、彼はカリスタの心の憧れを満たしてくれないばかりか、逆に何かに不足でもしているかのように自分を求めてくるのだ。カリスタは自分の心の憧れと心の中の呼び掛けとに何処までも忠実であろうとし、アジェリアスの求愛を拒絶してしまうのである。

カリスタに愛を断られたアジェリアスは、失意のうちに家路につくが、折からの酷暑で意識も朦朧とし、どうにかしてやっと家の前にたどり着いたものの、そこで意識を失って倒れてしまう。それから長い時間を経て意識を取り戻した時、病床の彼を暖かく介護していたのはカルタゴの司教シシリウス（Caecilius）であった。アジェリアスは健康を回復していくにつれシシリウスに対して自分を開き、やがて心の悩みまでも打ち明けるようになる。彼は初めて魂の指導者に出会ったような安堵感を覚え、シシリウスとの対話に熱中し、対話を通じて神の愛に目覚め、心の平和を取り戻し、次第に内面の変化を遂げていく。

アジェリアスとシシリウスとの天上的対話の高揚した場面に突如として割り込んでくるのが、傲慢不遜で自己中心的なジューバである。ジューバが加わったことで、それまでの静けさは破られてしまうが、更に緊迫感をあおるのは、いなごの大群の襲来である。いなごの大群は、太陽光線を受けて金色に輝く無数の雪片が、まるで一枚のジュータンを織り成して飛来してくるかのようにして、野原を、穀物畑を、庭園を、家屋敷を、灌木の繁みを、果樹園を、葡萄畑とオリーブ園を、そして森までも、すべてを覆い尽して突進する。いなごの大群が押し寄せるまえに眼前に開けていた牧歌的な風景は、彼らが去った後にはことごとく消失していた。この間の情景は、つぎの二行が語り尽している。

Before them,, was a paradise,
and behind them a desert.

やがて飢饉と疫病がはじまるが、その災害をキリスト教の流行によるたたりだとし、民衆はキリスト教徒の迫害に蜂起する。アジェリアスは迫害のターゲットとされるが、叔父のジューカンドスが手早く送ってきた少年に導かれて小屋を無事に脱出し、危うく難を逃れて叔父の家に匿まれる。アジェリアスが小屋を去った後、カリスタが彼の身を案じてやって来る。小屋にはシシリウスが残っていた。彼はカリスタに、アジェリアスは既に安全な場所へ逃れたから心配無用だが、彼女こそもしここで見付かったら危いと注意を促す。ところがカリスタは、自分はキリスト教徒ではないので危険はないと言って去ろうとはしない。そればかりか、却ってこの危急な状況下で泰然自若としているシシリウスの人格にひかれて自分の心にある問題を彼に打ち明ける。彼女は自分は心の中に何か限らないものに対して憧れを感じているが、異教徒として生れた以上その運命を背負って生きていかねばならないと言うのだ。これに対してシシリウスは、自分も生れながらの異教徒であったが、長じて歴史に現われた神と出会い、その愛を受容れた者であることを語る。

暴徒たちはもうそこまで押し迫っている。シシリアスはカリスタに危険だから逃げるよう促すが、彼女はキリスト教徒ではないから大丈夫だといって依然として逃げようとはせず、シシリアスの方こそすぐ逃げるように勧める。暴徒らが愈々押し迫った時、シシリアスはカリスタに羊皮紙に書き写されたルカ福音書を渡す。それから胸に抱いていた聖体を拝領し終って、辺りを見回した時にはカリスタの姿はもう見えなかった。シシリアスも直ちに小屋から逃げ出すが、彼は暴徒らの手中に陥ってしまう。

暴徒らに捕えられたシシリアスは後手に縛られ、ろばの背に乘せられてシッカの街の方へ連れていかれる。彼をろばに乗せたのはジューバだった。ジューバも暴徒らに和して喚いていたが、陽が沈んで辺りがすっかり暗くなると急にシシリアスの手を縛っていた革紐を解き、それでろばの脇腹を殴りつけてろばを全速力で走らせ、こうしてシシリアスを逃がしたのである。そして自分はシッカから数マイル離れたところの原生林に住む継母ガータのもとへ事の成り行きを報告に行く。ガータは悪霊と交わっている邪悪な女であり、人間の生血を吸って生きている。彼女は、夕べは良くやったといってジューバを誉めるのであるが、彼はキリスト教徒が他の人間より悪いものだという証拠は何も見出せなかったと言って、ガータが拝んでいるものに仕えることも、彼女が自分の母であることを拒否し、彼女のもとから逃げ出す。

ジューカンドスは、なんとかしてアジェリアスを危険極まりないキリスト教から救い出そうと色々と言説を試みているがなかなか成功しない。どうしてもアジェリアスを説得できず万策尽きたと感じるや、「もし、お前の云々する真理というものがカリスタを牢獄から出すことができるのなら、真理について語るのもよからう。」と言って、カリスタがキリスト教徒の嫌疑で捕えられていることを明かす。シシリアスより一足先にアジェリアスの小屋を出ていたカリスタもまた暴徒らに捕えられ、キリスト教徒と間違えられて投獄されていたのである。初めてこのことを知ったアジェリアスは非常に驚き、カリスタはキリスト教徒ではあり得ないとしながらも、もしそれが本当であれば素晴らしいことだと心から思う。ジューカンドスは、カリスタはキリスト教を信じてなどいないのだが、自分の恋する人と運命を共有したがつているのだから、アジェリアスが信仰を捨てればことは直ちに解決すると言って、一層熱を込めて甥を説得する。アジェリアスは、カリスタが信仰と愛を持たないまま死なねばならないことをあわれに思い、今の苦しみが無価値でないことと、もし主キリストのために死ぬのなら命へと移れるのだという何を何としてでも彼女に伝えに行こうと思う。

妹のカリスタがキリスト教徒の嫌疑で捕えられたことを知ったアリストはひどい衝撃を受け、大いに嘆き悲しみ、ジューカンドスに助けを求めてやって来る。ジューカンドスはアジェリアスの頑固さに手を焼いていたところである。そこで二人は一緒になってカリスタを救出する方策をあれこれと考えた末、ジューカンドスの友人コルネリアス (Cornelius) のところへ相談に行く。コルネリアスはローマ人で、中央の事情に詳しく、政治力もある。彼はカリスタがはっきりとキリスト教徒であることを否定しているなら話は簡単で、彼女はただ皇帝に対して誓いさえすれば直ちに釈放されるだろうという。ところが、カリスタはキリスト教徒であることを否定しているにも拘らず、神々に一抹の香を焚くことも、皇帝の名によって誓うことにも頑として応じない。

カリスタがシッカの街の行政長官の前に出頭しなければならない日がやって来た。特別の許可を得たアリストは、出頭のまえに彼女に面会に来る。彼女の姿は見る影もなく、まるで別人のようになっていたが、それよりも信じ難いことには、彼女は兄を見るや、「時間がないのです。早くキリスト教の司祭を呼んで下さい!」と叫んだのである。行政長官の前に出頭したカリスタは自分はキリスト教徒ではないとはっきり宣言し、キリスト教徒の礼拝場所へ行ったことも、キリスト教徒としての如何なる誓いを立てたことも、また犠牲の儀式に与かったこともないと断言するが、同時に、偽りの神々に犠牲を捧げることなどできないときっぱり拒絶する。これを聞いたアリストはカリスタは気が狂ってしまったのだと言って、必死になって彼女が神殿のために他の誰にも増して熱心に多くの仕事をしてきた如何に敬虔なる者であるかを弁明する。しかしどんなに兄が弁明したとしても、本人が肯んじない以上どうすることも出来ない。困り果てた行政長官は、カリスタを一旦拘置所へ戻し、その間にカルタゴの役人の指

示を仰ぐことにしたのである。再び拘置所へ戻されたカリスタのもとへ、アリストはコルネリアスから紹介されたポレモ (Polemo) というギリシャ人の哲学者を連れてくる。ポレモはかの大哲学者プロティノスの友人だという人で、カリスタの前で滔々と哲学論議をする。しかしカリスタはそのようなものによっては些かも動かされないばかりか、却って彼女は自分の心のなかの本当の問題を披歴する。ポレモは、カリスタはとても自分の手には負えないと悟って、怒り立ち去ってしまう。

カリスタに最後のチャンスが与えられた。コルネリアスの尽力で、実際に犠牲を捧げなくても捧げたとして署名だけをすれば釈放されるようになったのだ。しかしカリスタは心の中の声に逆らうことはできないから、自分の否定しているものにはたとえ署名だけであろうとするわけにはいかない。所詮それは犠牲を肯定することと異ならないのではないか。彼女はこの最後のチャンスをも拒否してしまう。アリストの妹に対する愛は強いものであるが、その心を理解することはできず、ただ彼女の現世の幸福に対する強烈な望みだけを持っている。彼は如何しても妹の心を変えることのできない苛立ちと失望とで、遂に自己破壊へ向かうのである。

孤独と静寂が支配する独房のなかでカリスタはそれまでしっかり身に着けていた福音書を取り出し、静かにそれを読み始める。彼女は知性と心のすべてを傾けつつ、また心の中で語り掛けているある「パーソナル」な声にじっと聴き入りつつ読み進む。そのうちにその声の主は、次第に現実の人格として彼女に姿を示してくる。それと同時に、彼女自身の本当の姿も見えてきて、段々自己嫌悪に陥っていく。しかしそれはやがて、自分の本当の姿を受け容れる謙虚さへと変わっていく。そして罪の女とイエスとの出会いの場面にまで読み至った時、自分がその女であることに気づき、そのままの自分がイエスに受容られていることを悟るのである。そこからカリスタの心の転向が始まる。それは単なる思想的な転向ではなかった。それは、哲学も思想も、命も愛も、一切を自らのなかに宿す唯一絶対なる人格との出会いであった。そして、その人格と彼女の人格とが向きあうことになるのである。

シンシアスが警戒の網を潜って牢獄を訪れた時、カリスタは些かも躊躇することなく洗礼を授けてくれるように願う。洗礼の水が額を流れた時、かつて味わったことのないような平和と静けさが彼女の心を満たしたのであった。

カリスタが渴望していたのは、そして心の中に絶えず聴いていたある声というのは、ともに愛そのものである絶対の方、人格的に実在する方であった。自分を愛して下さり、命までも捧げてその愛を証して下さったその方に、御自分を全く与えて下さるほどに愛して下さったその方に、遂にカリスタは出会ったのである。この方こそ、真実で唯一無二の愛そのものであり、その方にすべてを賭けることが出来る。そしてそうしようとカリスタは堅く心に決めたのである。なぜなら、愛に一切を賭けるとき、死は決して終りではない。いやそれどころか、死は愛である方と永遠にともにある命の始まりであることを確信したのだから。その愛にすべてを委ねてカリスタは残酷な刑具の上に身を横たえたのである。

カリスタの死後、不思議なことが沢山起った。とりわけ顕著な出来事はジューバの回心である。彼はカリスタの遺体が安置されている教会に十年間仕え、毎朝教会の入口でミサに与っていたが、ある朝司教のところへ行って、洗礼を授けてくれるように願った。カリスタが彼に現われて真生な心を取り戻させたのだという。洗礼を受けたジューバはカリスタの墓へ行き、そこで祈り続けていたが、翌朝人に見つけられた時には祈りの姿勢のままで死んでいた。

アジェリアスは後年シッカの司教となり、カリスタの遺体が安置された中央祭壇で毎朝ミサを捧げていたが、ディオクレティアヌスの迫害時代に殉教した。そしてカリスタと同じ祭壇の下に葬られたのである。

3. 物語の舞台設定、描写、構成等について

In no province of the vast Roman empire, as it existed in the middle of the third century, did nature wear a richer or a more joyous garb than she displayed in Proconsular Africa, a territory of which

Carthage was the metropolice, and Sicca might be considered the centre. (p. 1)

物語の舞台は、三世紀中葉におけるローマ帝国の属州、北アフリカの首都カルタゴの中心的な街シッカである。上に引用したのは物語の書き出しの部分であるが、⁽¹⁴⁾作者は物語を始めるに当たって、先ず読者の面前に豊かな自然に恵まれたのどかな情景を示し、その中心にシッカの街を設定している。次いで読者を地理的に一段と高いところへ連れていき、そこで風景全体を眺望させた後、物語が展開されるシッカの街を示し、読者が全体を眺望しながら自然に物語の中へ入っていけるよう導入の心理的工夫をしている。⁽¹⁵⁾

シッカは読者の視坐の中心に設定されているとはいえ、風景の中心にあるわけではなく、眼前に広がる風景の北東、荒涼たる険しい山岳地帯にある。それとは対照的に、西南地方は明るく豊かな田園地帯であり、多彩な色調で織りなされた深々とした森林がアトラス山脈にまで連なり、彼方にはヌミディア地方の山々もかすかに見えている。

広大な風景を眺望した後、読者の眼は街の周辺へと導かれる。そこでは人々の裕福な暮らしを窺わせる情景が展望される。平地には庭園があり、葡萄園、とうもろこし畑、そして牧草地もある。並木道が通り、地中海にまで通じる人道も出来ている。山の斜面にはオレンジの果樹園があり、オリーブやパームのプランテーションも行なわれている。

風景がこんなにも美しいのは、読者の眼には見えないのだが、実はアトラス山脈より湧き出る泉が大地を潤しているからなのだ。作者は読者の想像力をこの美しい草木や果実に生命を与え生かし続ける泉へといざない、読者の心を見えざるのちへと潜ませるのである。

Tourists might have complained of the absence of water from the scene; but the native peasant would have explained to them that the eye alone had reason to be discontented, and that the thick foliage and the uneven surface did but conceal what mother earth with no niggard bounty supplied. (p. 2)

かなたに見え隠れしている時の建築の粋を凝らした私邸および公共の建物、高い岩山にそびえている大聖堂や寺院を展望した後、読者はシッカの街全体がよく見えるように街の南東に立たされる。街の中には様々な宗教の寺院が混在している。丘を上下する狭く曲がりくねった道の外側には、公衆浴場、劇場、神殿、競技場、長い柱廊、皇帝の乗馬姿の像などが立ち並び、中央には大きな噴水が水しぶきをあげている。

このような一大パノラマを眺望した後、次に読者は裕福な農場へ連れていかれる。そこに最初の人物が登場するからである。

And now, withdrawing our eyes from the panorama, whether in its distant or nearer objects, if we would at length contemplate the spot itself from which we have been last surveying it, we shall find almost as much to repay attention, and to elicit admiration. We stand in the midst of a farm of some wealthy proprietor, consisting of a number of fields and gardens, separated from each other by hedges of cactus or the aloe. (p. 5)

季節は初夏であろうか。大麦の刈り入れは終わったところで、葡萄園では奴隷たちが強い日差しを浴びながら葡萄の枝を剪定している。豊かな刈り入れの時を約束しているかのようなこの風景の中に、作者は異教の詩人の詠った母なる大地に育まれる命の喜びの息吹をごく自然に吹き込んでいく。「キリスト教徒と異教徒との関係を想像して表現してみよう」とした作者の意図が既に窺われる。

以上見てきたように、冒頭の牧歌的パノラマは、物語に登場する人物の導入、そこでこれから発生する事件の展開と推移、様々な人物の人格的成長などを効果的に演出するための舞台設定として、相当に

工夫が凝らされている。色彩の濃淡、光と陰、音の大小、風景の起伏と遠近、などなどを交ぜて、広がりとお行を持たせた情景描写は、そこに登場する人物をくっきりと浮び上がらせる効果を持っている。このようにして始まる第一章は、最後の章と繋ぎ合っている。物語全体を包む一つの雰囲気構成している。それは「静けさ」である。いや、「神の静けさ」と言ってよいかもしれない。自然を超越するある存在、と同時に自然の中に内在する存在はまた地下深くに潜みつつ地表の豊さを育む命でもある。——つまり、物語全体が神御自身の中に包み込まれてしまっているかのような静けさを醸し出しているのである。

＊

読者が眼前の情景に見とれていると、その耳に蟬や小鳥たちの鳴声が入ってくる。そのうちに今度はギリシャ古謡の調べが響いてくる。その調べは小道の向こうの繁みの方から聞こえるようなので、じっと聞き耳を立てていると、それは少しずつ大きくなって近すぎ、次第にはっきりと聞き取れるようになる。すると葡萄園で働く奴隷たちの間に、膝まで丈のあるチョッキにベルトを締め、脛に達する長靴を履いたヨーロッパ的な風貌の青年がひょいと出現する。最初の登場人物アジェリアスである。アジェリアスは穏やかで明るい声の持ち主であるが、遠慮がちで田舎っぽいところのある単純で正直な青年で、都会を好まず世間ずれしていない反面、悪に対する警戒心がない。次いで彼の生い立ちや人格形成に与えた家庭環境・学校生活等を初め、現在の状況も細かく叙述され、性格や内面の状態・変化など心理的な面まで繊細な観察眼と鋭い洞察力をもって描かれている。

このように『カリスタ』における登場人物は、一人一人がその風貌をはじめ、身体的特長から外見上の人となりまで、立体的な輪郭で描き出されている。物語の中心人物であるカリスタは言うまでもなく、アジェリアスの弟ジューバを初め、魔女のガータ、徹底した現世主義者であり実利主義者であるジュカンダス、誇り高きギリシャ人アリスト、ローマ人のコルネリアス、哲学者のボレモ、それに走り使いの少年など、主要な人物からほんの端役に至るまで、行き届いた細かいタッチで描かれ、物語全体のかでそれぞれが自分の役割を演じ切っている。従って、一人一人が個性的で主体的な生きた人物となって物語を立体的で奥行きのある生命感と躍動感に溢れたものとしていると同時に、物語が現実感をもって読者に迫る力を持っているのである。

次いで人物描写の特長は、人物の心の状態、動き、変化などが周囲の自然情景や舞台設定と深く関わって描かれていることである。つまり、人物の心理的変化および人格的發展を描写するのに、周囲の情景はきわめて重要な素材となっているのである。先ず周囲の情景と内面の変化についての描写をアジェリアスに追ってみよう。カリスタから求愛を退けられたアジェリアスは熱病に倒れ、シリシアスの手厚い介護で意識を取り戻し、次第に健康を回復して精神的にも強くなっていくが、その間の心理的・肉体的変化の過程は周囲の風景とオーバーラップして次のように描かれている。

This sort of intercourse, growing in frequency and fullness, went on for about a week, till Agellius was able to walk with support, and to leave the cottage. The priest and his own slave took him between them, and seated him one evening in sight of the glorious prospect, traversed by the long shadow of the far mountains, behind which the sun was making its way. The air was filled with a thousand odours; the brilliant colouring of the western heavens was contrasted with the more sober but varied tints of the rich country. The wheat and barley harvest was over; but the beans were late, and still stood in the fields. The olives and chestnut-trees were full of fruit; the early fig was supplying the markets with food; and the numerous vineyards were patiently awaiting the suns of the next month slowly to perfect their present promise. The beautiful scene had a moral dignity, from its associations with human sustenance and well being. The inexpressible calmness of evening was flung, like a robe, over it. Its sweetness was too much for one who had been confined to the monotony of a sick room, and was still an invalid. He sat silent, and in tears. It was life from the dead; and he felt

he had risen to a different life. And thus he came out evening after evening ; convalescent, gradually and surely advancing to perfect restoration of his health.

One evening he said, after feeding his eyes and thoughts for some time with the prospect, "Mansui hereditabunt terram."* They alone have real enjoyment of this earth who believe in its Maker. Every breath of air seems to whisper how good He is to me." (pp. 159-160)

*"The meek shall inherit the earth."

次にジューバの利己的で荒れた心の状態は、魔女ガータ⁽¹⁶⁾の住む原生林の暗闇と一体となって描かれる。しかし彼はある見えない力に導かれて密林を出ていく過程で、自分自身の暗黒の部分からの脱出を達成するのである。⁽¹⁷⁾ガータのところから逃げ出し、原生林を通り、沢山の恐ろしい獣と出会い、自然の中に身を置くことなどによって、自分の中にある何かに目覚め、次第に彼自身の内部にある暗黒の部分から脱出する。そして、様々な動物の間を、夜闇の中を、森を通り抜け、山を登り進み行くうちに、超自然的な力に強められ、肉体的にも強くなっていく。まだ昔の自分を引きずってはいるが、自分の意志とは別に働くある抗いがたい力によって、ジューバはぐいぐいと美と祝福と平和の中へと引き込まれていく。移行の完了はまだ後のことになるが、カリスタの側、つまり恩寵の側への移行がはじまるのである。その件を見よう。

Juba stood and gazed till the sun rose opposit to him, envying, repining, hating, like Satan looking in upon Paradise. The wild mountains, or the locust-smitten tract would have better suited the tumult of his mind. It would have been a relief to him to have retreated from so fair a scene, and to have retraced his steps, but he was not his own master, and was hurried on. Sorely against his determined strong resolve and will, crying out and protesting and shuddering, the youth was forced along into the fulness of beauty and blessing with which he was so little in tune. With rage and terror he recognized that he had no part in his own movements, but was a mere slave. In spite of himself he must go forward and behold a peace and sweetness which witnessed against him. He dashed down through the thick grass, plunged into the water, and without rest or respite began a second course of aimless toil and travail through the day. (pp. 269-270)

Another restless, fearful night amid the open country; but it seemed as if the worst had passed, and, though still under the heavy chastisement of his pride, there was now more in Juba of human action and of effectual will. The day broke, and he found himself on the road to Sicca. The beautiful outline of the city was right before him. (p. 272)

老いたる醜悪な魔女であり、憎しみの権化、闇の勢力であるガータに対して、若く清純な乙女カリスタは絶対の愛に向かう恩寵の器であり、⁽¹⁸⁾ジューバはこの両者の力関係の間にあるかのように描かれている。即ち、ガータのもとを逃れたジューバは、やがて本来の自己に回帰し、カリスタの影響で最後には自己を超越するのである。

*

何といっても物語の中心人物はカリスタである。しかし彼女が舞台の前面に出てくるのはかなり後のほうである。後半になってからカリスタの上に焦点が絞られていくが、それまでの風景や情景描写、登場人物、様々な事件の経過と展開等、すべてがカリスタを舞台の前面中央へ導き出してくる導者のような役割を果たしている。既に「あらすじ」で見たように、カリスタは、乳母のキオーニ、キリスト教徒であるアジェリアス、司教のシシリアス等他の人物との出会いにより、内的に成長していくわけであるが、その詳しい分析と考察は後に行なうので、ここでは彼女の内面で行なわれる変化を示す次の文章を引用するに留めて置こう。

She might, indeed, have been able afterwards, on looking back, to say many things of herself; and she would have recognized that, while she was continually differing from herself, in that she was changing; yet it was not a change which involved contrariety, but one which expanded itself in (as it were) concentric circles, and only fulfilled, as time went on, the promise of its beginning. (p. 291)

作者は、読者の心と精神をカリスタの内面に集中させるために彼女を薄暗い独房の中の孤独な存在として舞台の中央に置く。スポットライトが彼女だけを照らし出しているような場面である。余分なものを一切剥奪した狭い空間、辺りを支配する沈黙と静寂、そしてそこを占める孤独な存在、そこにはまさに精神の凝縮がある。読者の視線はその人物一身に集められ、心はその内面に誘い入れられてその変化に追隨していかざるを得ないような舞台設定である。読者は恰かも劇場の中の観客になったような錯覚を覚え、かたずを飲んでカリスタを見詰めていると、カリスタはそれまでしっかりと身に付けていた福音書を取り出して、やがて静かにそれを読み始める。読者はこのようにして自然にカリスタの内面に導き入れられて行く。

Meanwhile, to return to the prisoner herself, what was the consolation, what the occupation of Callista in this waiting time, ere the Proconsul had sent his answer? ...It is difficult to say under what feelings she had been reluctant to open the Holy Gospel, which Caecilius had entrusted to her care. ...However, now left absolutely to herself, Aristo gone, and the answer of the government to the magistracy not having yet come, she recurred to the parchment, and to the Bishop's words, which ran "Here you will see who it is we love," or language to that effect. It was tightly lodged under her girdle, and so had escaped in the confusion of that terrible evening. She opened it at length, and read. (pp. 324-325)

She read a few paragraphs, and became interested, and in no long time she was absorbed in the volume. When she had once taken it up, she did not lay it down. Even at other times she would have prized it, but now, when she was so desolate and lonely, it was simply a gift from an unseen world. It opened a view of a new state and community of beings, which only seemed too beautiful to be possible. (pp. 325-326)

カリスタは、心のなかに語り掛けてくるある「パーソナル」な声にじっと聞き入りながら読み続けていく。その声の主は、次第に現実の人格としてその姿を彼女に示してくる。

Here was He who spoke to her in her conscience, whose voice she heard, whose Person she was seeking for. ...That image sank deep into her; she felt it to be a reality. She said to herself, "This is no poet's dream; it is the delineation of a real individual. There is too much truth, and nature, and life and exactness about it, to be anything else." (p. 326)

その人格がますます鮮明に現われてくるにつれ、カリスタは自分との大きな隔たりを感じ、尻込みさえするのだが、同時に己の醜さもはっきり見えるようになり、自分を輕蔑せずにはいられなくなる。しかし、こうした自己卑下にもかかわらず、いや、却ってそのなかで、彼女は初めて本来の自分をそのままに受け入れてくれる人格との出会いを果たすのである。

Yet she shrank from it; it made her feel her own difference from it, and a feeling of humiliation came upon her mind, such as she never had had before. She began to despise herself more thoroughly day by day; yet she recollected various passages in the history which reassured her amid her self-abasement, especially that of His tenderness and love for the poor girl at the feast, who would anoint His feet; and the full tears stood in her eyes, and she fancied she was that sinful child, and that He did not repel her.

(p. 326)

そしてカリスタは、これまで教えられてきた幸せや喜びなどとは全く別の次元の、遙かに優れた美を見出し、この世の知恵や力などとは正に逆説的である愚かさや屈辱のなかに、祝福と、遙に深い平和、静けさと落ち着きがあることを知った。

She saw that there was a higher beauty than that which the order and harmony of the natural world revealed, and a deeper peace and calm than that which the exercise, whether of the intellect or of the purest human affection, can supply. (p. 327)

人生のあらゆることに意味を見出した今、自分自身の存在、歴史、現在の状況と将来についても、新しい光の中に見ることができるようになったのである。

Life and death, action and suffering, fortunes and abilities, all had now a new meaning and application. (p. 328)

もはやカリスタの思いは、哲学も思想も命も愛も、一切を自らのなかに宿す絶対なるお方で占められていた。こうして彼女はそのお方と、人格的に向き合ったのである。

...the ruling sovereign thought of the whole was He, who exemplified all this wonderful philosophy in Himself. (p. 328)

Callista was now living, not in the thought of herself, but of another. (p. 345)

そして裁きの庭で、“I am content with my One and only Lord.” (p. 362)と宣言し、その方への愛のために死を引き受け、刑具の上に横たわった。カリスタは、“For Thee, my Lord and Love, for Thee! ...Accept me, O my Love, upon this bed of pain!... And come to me, O my Love, make haste and come!” (p. 369)という言葉を残して、いまや彼女の「主」であり「愛そのもの」である方のもとへと一直線に旅立ったのである。

*

『カリスタ』には、様々な事件が発生してそこからストーリーが展開していくといった幾つかの「やま」が用意されている。とりわけ第十五章と第十六章とに亘って叙述されるいなごの大群の襲来の中からその過ぎ去った後の惨状に至るまでの過程は、民衆を次第にキリスト教徒迫害へとかりたてていく心理的な推移と重なって、ストーリーを新たな展開へ導いていく大きな山場となっている。ストーリーのこうした展開を通して、読者の興味はカリスタという一人の人物に集中せしめられ、遂には彼女の内面にまでひき入れられていくのである。

こうして我々も彼女の内面に入っていくと、「罪の女とイエスの出会い」の場面が、カリスタとイエスの人格との、最初で、しかも決定的な出会いの場面になっていることに気がつく⁽¹⁹⁾。この場面は、ほんの二・三行で書かれているだけであるし、物語のかなり終りのほうに出てくるために見落されがちであるが、後に牢獄を訪れたシシリアスに対してカリスタが、開口一番に言った「あの女に、あんなに優しく語り掛けたそのお方を、私にもお与えください！」 (“...Give me Him who spoke so kindly to that woman...”)という言葉と併せて考えると、実は、この場面が物語の中心となっていて、それまでの叙述はすべてそこへ導くための前書きであったとさえ思えるのである。作者は読者をそこまで一気に引っ

張っていき、その一点に読者の注意を集中させると、今度はそこから読者をカリスタとともに別な高みへと導いていくかのである。この場面が、カリスタに全く新しい地平を開く転向点ともなっているからである。

もし、この一点へと集中していく物語の進行を求心運動として捕えるならば、そこからカリスタの内面が急速に変化し、愛と命を賭けて呼びかけに應えていくという物語の展開は、上昇運動にも例えられる。そして物語全体はこの点を中心に、丁度池に投げられた石が波紋を生じ、それが次々と外側へ波及していくように構成されているとも考えられる。他方、パーソナリズムというテーマから物語を見ると、超越的人格に対する絶えざる憧れ、そして上からの呼びかけ、つまり「神と我れ」という縦の線が物語を貫いていることに気付く。更に、他の人格と出会うことによって人格的に成長していくという横の線もある。超越的な絶対者へ向かう人格の内発的な成長は、他の人格と出会うこと無しにはその止揚はあり得ないが、カリスタにおいては、あの場面がその決定的な契機となっている。従って、前述したように、あの縦の線と横の線が交差する点は、またあの「罪の女とイエスとの出会い」の一点とも重なっている。筆者は、この点に小説『カリスタ』におけるニューマンのパーソナリズムは位置づけられるのではないかと思うのである。

先に見たように、物語冒頭の静けさは、物語の最後まで乱されることなく続いている。カリスタの殉教の場面は余りにも残酷であるが、それにもかかわらず、彼女の死後物語に漲るのは静かな喜びであり、天上的な平和なのだ。物語を包むこの静けさと平和は、一つにはカルタゴの司教シシリアスの人格から来るのではないかと思う。丁度物語の最初に紹介されたあの隠れた泉が豊穡な風景を育んでいるのと同様に、謙遜、信仰、愛、祈りによって自己の内に、また神の内に沈潜している彼の内的深さがそのまま物語の深さとなって、物語に計り知れない奥行きを与えている。いわばシシリアスは物語の「心」のような存在である。また長い年月と多くの経験を経て「今の私」に至ったこの老練なキリスト者の人格のうちに潜む「恩寵の優位」は、イエスと出会って短時日の内に殉教した少女カリスタにおける「恩寵の勝利」に繋るものでもある。彼女の死は、イエスに対する信頼と愛の証であり、彼女の人格的完成の頂点を示すものであるが、それはまた恩寵の勝利でもあった。⁽²⁰⁾従って、『カリスタ』におけるパーソナリズムの更にその底にあるのは、カリスタの葬儀の時に歌われた次の讃美歌、つまり、「恩寵の栄光の賛美」そのものに他ならないと思うのである。

"Grace formed her out of sinful dust ;
She knelt, a soul defiled ;
She rose in all the faith and trust
And sweetness of a child.

"And in the freshness of that love
She preached by word and deed,
The mysteries of the world above...
Her new-found glorious creed.

"And running, in a little hour,
Of life the course complete,
She reached the throne of endless power,
And sits at Jesus' feet. (p. 398)

(1990年10月31日受理)

注

- (1) ニューマンのローマ滞在は1846年10月28日より翌年11月末迄である。この間、1847年5月30日にカトリック司祭に叙階されている。

- (2) 『得失』は、1848年に匿名で出版され、1874年の第6版で初めてタイトル・ページに実名が著された。
- (3) See "Postscripts to Later Editions" of *Callista* February 8, 1856.
- (4) 1853年に出版された Charles Kingsley の *Hypatia* に対する応答として書かれたという人や、また、ニューマンは Nicholas Wiseman の *Fabiola* に対抗して書いたという人もある。確かにニューマンは1854年1月にワイズマンに、その著『ファビオラ』の続編を書いてはどうかと言われており、それを断っている。(See *Letters and Diaries*, vol. XVI p. 7, January 4, 1854) しかし、そのことが中断していた草稿を思い出させるきっかけとなったことは考えられる。
- (5) 主人公カリスタの名前は、おそらく3世紀の殉教者聖カリストからヒントを得たのではなかろうか。ローマ滞在中の1846年11月5日の日記には幾つかのカタコンベ (Catacombe) を訪れたことが記されている。Callistus was, made Pope in 217, suffered martyrdom in Transterere in 222 (Guide to the Catacomb of St. Callistus', Vatican, 1983)
- (6) See Henri Bremond, Trans. by H. C. Corrance, *The Mystery of Newman* (London, Williams and Norgate, 1907) pp. 246-247. See also Richard Hatton, *Cardinal Newman* (London, Methuen and Co., 1891) p. 225. Meriol Trevor, *Newman Light in Winter* (London, Macmillan & Co. Ltd., 1962) p. 69. Allan G. Hill, "Originality and Realism in Newman's Novels" *Newman After a Hundred Years* (Oxford, Clarendon Press, 1990) p. 36.
- (7) Allan G. Hill, *Ibid.*, p. 42.
- (8) Bremond, *op. cit.*, pp. 172, 326. Hutton, *op. cit.*, pp. 221-222. Alfred Duggan "Introduction" *Callista*, (London, Burns and Oats, 1962, Universal Book edition)
- (9) See Duggan, *Ibid.*, vi. Bremond, *op. cit.*, pp. 221-222. Hutton, *op. cit.*, p. 221
- (10) See Charles Dessain, *Spirituality of John Henry Newman* (Ireland, Veritas Publication, 1971), pp. 39-40. Hutton *op. cit.*, p. 221. T. R. Wright, "Newman as Novelist", *John Henry Newman a Man for Our Time?* (ed. T. R. Wright Grevatt & Grevatt, Newcastle upon Tyne, 1983) p. 14.
また時の反カトリック的な英国の状況を暗示しているとも見るものも居る。Cf. *Ibid.*, p. 11.
トレヴァーは現在の教会の状況を先駆けて示したものであると言っている。Trevor, *op. cit.*, p. 70.
- (11) 長倉禮子『日本におけるニューマンの受容』(荒竹出版社 1987)、pp. 26-27. See also 荒川龍彦「ニューマンの思想と文学」『近代英文学の意味』(南雲堂 1964) p. 61-62.
- (12) See Dessain, *op. cit.*, pp. 45-46. Hutton, *op. cit.*, p. 225.
- (13) パーソナリズムということばは、一般に人格に最高の価値を置く哲学思想を指すが、それは「人格」(person)の概念の相違によって異なってくるであろう。また人格をどう見るかということも、様々な異なった立場からの見方が可能である。Person が人間の特性を統一的に表す「人格」という意味で用いられる場合、理性的で自由な存在としての人間の主体を意味する。Person および personalism については後に詳述することになろうが、本稿でも「人格」ということばは、「人間存在の価値を規定する自由と理性の主体としての人間の本質にかかわるもの」を意味している。
- (14) 本稿の引用文はすべて *Callista, A Tale of the Third Century* (Longman, Green, and Co., 1895)からである。
- (15) 冒頭のこの状況設定は、*The Idea of a University* (1852) の「平面に居ては真の知識を得ることは出来ない」ことを説明している文章を思い出させる。See Discourse VI: 3.
- (16) ガータのモデルは Sir Walter Scott (1721-1832) の *Guy Mannering* (1815) に出てくる Meg Merilees であろうか。ニューマンはスコットのものをよく読んでいた。
- (17) Hutton, *op. cit.*, pp. 220-221.
- (18) See *Callista* pp. 65-67.
- (19) 「はじめに」で述べたように、『カリスタ』はマリア・マグダレナの祝日の数日後に再び書き始められているが、筆者にはこのことと無関係ではないように思われるがどうであろうか。カリスタの葬儀の時の讃美歌の中でも She reached the throne of endless power, / And sits at Jesus' feet. と歌われている。ルカ福音書 7: 36-50 参照。
- (20) 恩寵の勝利については、後で詳しく見ることになろうが、ここでは恩寵によって非常に短時間のうちに人格の完成をみるという問題も含んでいるということを指摘するに留めよう。

付記 本稿は1990年10月24日に上智大学で行われたニューマン没後百年記念大会(日本ニューマン協会主催)での口答発表に基づいている。